HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	死と不死と人生の意味 ： 不死性要件をめぐるメッツの議論と不死に関するもう一つの解釈
Author(s)	吉沢, 文武
Citation	応用倫理, 5, 41-50
Issue Date	2011-11
DOI	https://doi.org/10.14943/ouyourin.5.41
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51875
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_yoshizawa_oyorinri_no5.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

死と不死と人生の意味 ── 不死性要件をめぐるメッツの議論と不死に関するもう一つの解釈

吉沢文武（千葉大学／日本学術振興会特別研究員 DC）

1．人生の意味に関する現代の議論

われわれの人生はどのような意味をもつのか。人生の意味とは何か。これこそ哲学の答えるべき問いだと世間の多くの人々は期待するかもしれない。だが、密接に関係すると思われる道徳や福利について学術的な議論が着実に進められてきたのとは対照的に、「人生の意味（meaning of life）」の概念は、学問としての哲学の関心をこれまであまり向けられてこなかったように思われる。しかしながら近年、分析哲学の領域で、人生の意味の概念を精緻化する作業が進められている。たとえばT・メッツは、主に現代英語圏における人生の意味についての諸見解の分類を行い、さらなる議論のための一定の見通しを与えた[1]。

本稿では、人生の意味と「不死」をめぐるメッツの議論に対して検討を行う。それを経て、メッツ（および現代の議論の多く）が指摘しない人生の意味と不死とのあいだのある関係を明確化することを試みる。私の考えでは、「不死」および「不死性要件（Immortality Requirement, 以下IR）」── 意味ある人生の実現には不死が必要だという考え ── についてメッツとは異なる理解が可能である。その理解は、「どうせ死んでしまうなら人生は無意味だ」[2]というニヒリズム的見解 ── 人が死ぬという事実からあらゆる人生の無意味さがただちに帰結するとする見解 ── に含まれるある種の誤りを明らかにするものであるだろう。

本稿の議論は次のように進む。まずメッツによる分類に従い、人生の意味に関する現代の諸見解を紹介する。そこでは、メッツの分類のもとで、不死への言及を含む見解が「超自然主義」に分類されることを確認する。次に「不死性要件」に関するメッツの議論を整理して吟味する。私の考えでは、不死についてのメッツの議論は、人生を意味あるものにする性質とその持ち主の持続、両者のあいだの時間的な条件の明確化によって、見通しのよいものとなる。さらにそれを踏まえたうえで、人生の意味と不死（および死）の関係について、メッツとは異なる理解が可能であると示す。そして最後に、本稿で提示する理解によって、上述のようなニヒリズム的見解を退けら

1　英語圏の分析哲学における人生の意味の議論について、1980年から2001年の議論のサーヴェイがMetz（2002）で、2002年から2006年の議論のサーヴェイがMetz（2007）で行われている。

2　トルストイ『懺悔』、とくに31頁（本稿第4節の引用箇所を参照）。このような主張を行う哲学者として国内では中島義道がよく知られている。

> ほとんど毎日「ああ、大変なことだ」と呟いていた。そして、「どうせ死んでしまう、どうせみんな無くなってしまうのだから、人生は何をしても虚しい」と思っていた（中島（2008）34-5頁）。

> 「どうせ」はあらゆる人生の営みをなぎ倒すほどの威力を持っている。希望の大学に受かっても、真の友人を見出しても、［…］［反対に］性格も暗くて何をしてもうまくいかない男も、「どうせ」死んでしまうのです（中島（2008）、文庫版あとがき、193-4頁、［　］内は引用者による補足）。

れるという示唆を行う。

2. メッツによる分類

メッツは、人生の意味がどのように実現されるかについての見解を「超自然主義」と「自然主義」に分け、さらに超自然主義を「神中心説」と「魂中心説」の二つ、自然主義を「主観主義」と「客観主義」の二つに分類する。超自然主義とは、人生が意味をもつには霊的な超自然的存在者が必要だとする見解であり、神が必要だとする立場が「神中心説」、不死の魂が必要だとする立場が「魂中心説」である。それに対して自然主義とは、人生が意味をもつためにそうした超自然的存在者は必要でなく、物理的な世界だけで十分だとする見解である。自然主義は、ある人の人生の意味の実現にとってその人の特定の賛成的態度が必要かつ十分な条件であるとする「主観主義」と、それだけでは十分でないとする「客観主義」の二つに分けられる[3]。

メッツは、人生の意味の概念が、福利や道徳性といった他の単一の概念には還元できないと主張する[4]。そして人生の意味についての諸々の見解は、超自然主義的なものであれ自然主義的なものであれ、次の問いに答えるという点でのみ統一性をもつ、いわば家族的な類似性によってまとめられた集団なのだという主張を行っている。その問いとは、（人生の意味の問題がたんに福利と道徳性の問題に尽くされないとして）「どのようにして人は人生に目的をもつのか、どのようにして個人は動物的本性を超えた内在的価値と結びつけられるべきか、どのようにして大きな賞賛に値することをするか」[5]という問いである。

メッツによる分類は、福利に関するおなじみの分類と並行的なものであり、それ自体妥当なものとして受けいれてよいと思われる[6]。ここでは不死の扱いについて確認しておきたい。メッツの分類は、それぞれの見解が意味ある人生を実現可能だと主張するか否かに関して、中立的な分類である。たとえば、意味ある人生に不死が必要だという IR を主張しながらその実現が不可能だとも主張するニヒリズム的見解は、超自然主義に分類される。しかしのちに見るように、私の考えでは、人生の意味の条件とその実現の可否についての主張の関係はもっと微妙なものである。とくに不死に関して言えば、自然主義的存在論（魂や神の存在を否定する立場）のもとで IR を主張する見解の少なくとも一部は、自然主義的に理解することが適切だと考える。

3　Metz（2002）, pp. 783-801, cf. Metz（2001）, pp. 138-40.

4　Metz（2008）, sec. 1, cf. Metz（2001）, p. 138, Metz（2002）, p. 782. 道徳性と人生の意味の密接な関係を論じたものとしてはたとえば Thomas（2005）。

5　Metz（2001）, pp. 150-1. メッツが挙げる人生の意味と密接に関係する三つの要素 ── 目的をもつこと、自己を超越すること、賞賛（ないし尊敬）に値すること ── については、伊勢田（2005）、182-4 頁に簡潔に紹介されている。

6　自然主義の下位分類は D・パーフィット（Parfit（1984）, pp. 493-502［邦訳 667-79 頁］）や J・グリフィン（Griffin（1986）, pp. 7-72）による福利ないし自己利益に関する分類と並行的なものだと言える。パーフィットの用語で言えば、快楽説および欲求充足説が主観主義にあたり、客観的リスト説が客観主義にあたる。パーフィットは主観的基準と客観的基準のどちらにも適うことが必要だとする混成型の見解にも言及するが（Parfit（1984）, pp. 501-2［邦訳 678-9 頁］）、それと並行的に S・ウルフの次の立場を混成説として分類することもできるだろう（cf. Metz（2008）, sec. 3.2）。「意味は、主観的な魅力と客観的に魅力あるものが合致したときに生じる」（Wolf（1997）, p. 211）。

3. 不死性要件

意味ある人生には不死であることが必要だというのが、メッツの言う「不死性要件（IR）」である。メッツによれば、IR は哲学者を含む様々な論者によって支持されてきたが、それら IR を支持する論拠は三つに分類できる。つまり意味ある人生には「完全な正義（perfect justice）」、「究極的結果（ultimate consequence）」または「限界の超越（transcending limits）」が必要であり、それらのいずれもが不死を必要とする、というものである。すなわち、

PJ：生前に苦しんだ場合には失ったものに対して埋め合わせが、悪いことを行った場合にはそれに対する処罰が、また正しいことを行った場合には報酬がなければ、正義は完全に果たされず、人生は意味をもたない。不死は、生前に果たされない「完全な正義」のために必要とされる[7]。

UC：人生において追求に値するのは、滅びて無くなってしまわないような「究極的結果」を作り出すことだけである。自身が滅びないことを意味する不死が「究極的結果」のために必要とされる。

メッツによれば、何をしても死によって無になってしまうというトルストイ的見解[8]は、UC のような考えに基づき、それが不可能であるため人生は無意味だと主張するものである[9]。

TL：意味ある人生には、限界の超越や、自分自身を超える価値（や価値をもつもの）とのつながりが必要である。不死は「限界の超越」に必要とされる。というのは、それが人間の時間的限界の超越だからである。

メッツによればこの TL の見解は R・ノージックの議論に見いだせる[10]。

メッツは、これら既存の論拠がどれも IR を支持するものとしては不十分であると述べる。つまりメッツによれば、完全な正義と究極的結果と限界の超越のいずれからも不死が必要だということは帰結しない。そこでメッツはこれらの論拠が IR を支持するように再構成を行う。ただしメッツの目的は IR の擁護にあるのではなく、再構成した諸論拠が神中心要件（God-centred Requirement, 以下 GR）── 意味ある人生の実現には神が必要だという考え ── をも支持するということを示すことにある[11]。さらに詳しく見ていこう。

メッツが PJ を不十分だとする理由は次のものである。生前に起ることに対する埋め合わせや賞罰が仮に意味ある人生に必要だとしても、不死は必要でない。それは、有限の人生のなかで何を

7　Metz（2003）, pp. 164-70, cf. Metz（2002）, pp. 789-90.
8　トルストイ『懺悔』、とくに 31 頁。また本論文第 4・5 節の議論も参照のこと。
9　Metz（2003）, pp. 170-3, cf. Metz（2002）, pp. 788-9.
10　Nozick（1981）, pp. 594-5［邦訳下巻 462-4 頁］.
11　Metz（2003）, esp. pp. 176-7, cf. Metz（2002）, pp. 790-2. 私の見るところその意図は明言されていないと思われるが、人生の意味に関して、IR を支持する独立の（少なくとも神の存在と独立の）動機がないと示すことにメッツの主眼はある。

行うとしても、それに釣り合う報いを得るには有限の時間で十分だからである（正義が実現可能な世界で有限の期間存続すれば十分である）[12]。あるいは、道徳的に完成するために生前の時間では足りないとしても、永遠の時間は必要ない。たとえば、道徳的完成のあとに死ぬような理想的行為者も考えうる（要するに、完成後に死ぬとしても完成はすでに達成されている）[13]。

私の見解では、メッツによる議論は基本的に次の一つのパターンにまとめることができる。何であれ人生を意味あるものにする性質を「$\mathcal{P}$」で表そう。性質 $\mathcal{P}$ の帰属対象は時間のなかで持続する人である[14]。そしてそのような対象に対する $\mathcal{P}$ の帰属の仕方に関しては、時間的な条件がある。メッツの批判は要するに、$\mathcal{P}$ を得るためにその性質の持ち主の存続が永遠のものである必要はない、というものである。それは、$\mathcal{P}$ を獲得するために $\mathcal{P}$ の獲得時に存在していることは必要だが、獲得のあとの存続は必要ないからである。この議論の図式は UC、TL についても同様である。確認しよう。

UC への批判は次のものである。永遠の結果を生み出すために自分自身の永遠の存続は必要ない。ある人の行為によってなされた結果は、自分以外の永遠の存在者に影響をもたらすことやその業績が世代を超え永遠に語り継がれることで、永遠のものになることが可能だからである[15]。これは次のように言い換えられるだろう。ひとたび「永遠に存続する何かに影響を与える」という $\mathcal{P}$ を獲得すれば、それよりあとの持ち主の存続は必要ない。

TL 批判は次のものである。永遠に存続するのであれば、たしかに人は自身の限界を超越すると言える。しかしそれは、時間的な超越という超越の仕方の一つにすぎない。限界の超越は永遠の存続以外によっても、たとえば他者を愛することや芸術作品の創造によってもなされうる[16]。つまり「外部の価値とつながる」という $\mathcal{P}$ の獲得により、自身の限界を超越できるのである。そして $\mathcal{P}$ の獲得よりあとの存続は必要ない。

メッツはこれらの批判に対しそれぞれの論拠を修正する。その修正は、永遠の存続が帰結するような性質を考えるというものである。そのような性質を以下では「$\mathcal{P}^*$」と表す。$\mathcal{P}^*$ はもちろん人生を意味あるものにする性質の一種である。つまり、$\mathcal{P}^*$ によって代表される諸性質の集合は、$\mathcal{P}$ によって代表される諸性質の部分集合である。

PJ の修正は次のようになる。生前に有徳であった人にはその欲求に応じた報酬があるべきであり、それがなされてこそ正義が実現される。良識ある自律的な人[17]は「永遠の至福（bliss）」[18]や「永遠の理想的開花（flourishing）」[19]を欲する。この場合の $\mathcal{P}^*$ は「永遠の至福（開花）に対する欲求が充足する」という性質である。この修正では明示的に言及される形で「永遠」が $\mathcal{P}$ を得るための条件の一部になっている。つまり、不死は「永遠の至福（開花）」に必要であり、もちろんそれ

12　Metz（2003）, p. 165.
13　Metz（2003）, p. 167.「最終的には死ぬ道徳的に理想的な行為者」の例として「復活しないイエス（an unresurrected Jesus）」を考えることができるとメッツは述べる。
14　意味をもつのは、たしかにある人の「人生」である。しかし、人生が意味あるという性質は「人」がもつ性質である。家族が幸せであるという性質も、作家としての名声をもつという性質も、人生でなく人の性質である。
15　Metz（2003）, p. 171.
16　Metz（2003）, p. 174.
17　精神的に健康で、十分な情報に基づき選択し、神経症や脅迫、適応的選好形成の影響を受けない行為者である。Cf. Metz（2003）, p. 168, Metz（2007）, p. 200.
18　Metz（2003）, p. 169（強調は引用者）.
19　Metz（2007）, p. 200（強調は引用者）.

に対する欲求の充足にも必要というわけである。またそのような有徳な人は、神という概念を知ってさえいれば神との関わりをもつことも望む、とメッツは述べる[20]。

UC の修正においても、永遠の存続を必要とする形に再構成が目指される。修正版 UC において人生を意味あるものにする $\mathcal{P}^*$ は「無限の価値を認識する」ことである[21]。自身の行為の結果が適切な仕方で人生の意味に関係するには、その結果の価値を認識することが必要だからである。そのためには永遠の時間、つまり認識主体の永遠の存続が必要である。また、その無限の価値をもつものが何かと問われれば、自然な一つの答えが神である[22]。

TL は次のように修正される。そのさいの $\mathcal{P}^*$ は「動物的自己をはるかに超える内在的価値ともっとも強い仕方でつながる」[23] という性質である。不死の魂にはそれ自体、他の存在者からの独立性や、分解されないという統合性といった、物理的で感覚を有するという動物的本性を超えた内在的価値がある。そしてそれらと適切につながる仕方は「自分が魂をもつと学び、それが堕落しないよう配慮する」[24] ことである。さらに不死以外にそういった内在的価値をもつものは神で、神とつながることも人生を意味あるものにすると考えられる[25]。

私の考えでは、人生の意味と不死の関係についてメッツとは異なる理解が可能である（それについては次節で論じる）。それをおくとすれば、PJ、UC、TL に対するメッツの批判は説得的であると思われる。しかしながら、彼の修正の議論に対しては以下のような懸念を述べたい。まず、修正版 PJ について。良識ある自律的な人が「永遠の至福」を求めると考えるのはなぜなのか。至福や開花が望ましいものだという点はよいとして、それがなぜ「永遠」でなければならないのかは説明を要する。すなわち、有徳な人のもつ欲求の対象になぜ正義の実現や道徳的完成だけでなく永遠の至福や永遠の開花といったものを加える必要があるのか。その理由が示されないかぎりそれらの追加はアドホックなものに見える。修正版 UC に対しては次のような懸念を述べることが可能だ。無限の価値を認識することが必要だとしても、そのためになぜ認識主体の永遠の存続が必要なのか。無限の価値の認識を永遠の時間をかけて行うのではなく、ある時点ですっかり認識するのではなぜいけないのか。ひとたび無限の価値をある時点に認識したのちにその人が消滅するとしても、何も損なわれないのではないか。修正版 TL についても同様の指摘が可能である。霊的な魂であり統合性をもち続け、その価値に配慮し最終的に消滅しても、それには依然として価値があるのではないだろうか[26]。

20　Metz（2003）, p. 169.
21　Metz（2003）, pp. 172-3.
22　Metz（2003）, p. 173.
23　Metz（2003）, pp. 174-5.
24　Metz（2003）, p. 175.
25　Metz（2003）, p. 175. 修正版 TL に関するメッツの議論は少し不用意なように思われる。それまでの議論では魂の不死を「無限に存続する」という意味で用いるのに対し、TL の修正では「無時間的（atemporal）」という意味で用いるのである。たしかに Metz（2003）の冒頭 p. 163 において、永遠の生（eternal life）には「時間的」と「無時間的」という二つの意味があると述べられてはいる。しかし二つは異なるものであり、少なくともこの文脈では区別すべきものだろう。たとえば「過去未来の区別がない無時間的領域」（Metz（2003）, p. 165）ではどんな変化もなく、現世で得られないどんな性質も新たに得ることはないだろう。さらに不死が「無時間的」を意味するという選択肢が採用できるのであれば、PJ はメッツの批判をかわせるのではないか。つまり、PJ にはともかくも死後の魂が必要であり、魂になるとは無時間的領域に入ることであり、そこから IR が帰結する、というように。ちなみに Metz（2007）および Metz（2008）では、魂中心説の有力な論拠は「二つ」であると述べ、TL を含めていない。
26　メッツは PJ 批判のさい、必ずしも霊的な自己が永遠に存続するわけではないと述べる。「人の同一性が霊的実体によって構成されているとしても、［…］肉体より長く存続し、ある時点で消滅する霊魂（spirit）をもつと考えることが可能である」（Metz（2003）, p. 166）。

4. トルストイの主張

前節の議論をまとめよう。PJ と UC と TL の三つの論拠に対するメッツの批判は、$\mathcal{P}$ の獲得よりあとの主体の存続は必要でなく、ましてや永遠の存続も必要ない、というものである[27]。メッツの提案する論拠の修正は、いわば不死帰結的な $\mathcal{P}$（すなわち $\mathcal{P}^*$）を考え出すというものである。その議論は、性質の持ち主の存続に関する主張である IR を $\mathcal{P}$ の要件の一部として再構成するという形になっている。そしてたしかに彼の提案する $\mathcal{P}^*$ は永遠の存続を帰結するものだが、しかしながら、さらなる擁護が示されないかぎりどれも恣意的なものに思われる。（それゆえ論拠の修正の議論に基づく IR と GR との関係に関する議論の正しさもまた、十分には示されてはいないことになるだろう。）

三つの論拠に対するメッツの批判は正しいと思われる。それらの論拠はじつのところ不死性を要請しない。さらに私の見るところ、不死を帰結する形にそれらを修正することは、メッツが考えるほど容易ではない。ひょっとすると、IR における「不死」の意味を弱めることによって、それらの論拠を妥当なものとして理解することができるかもしれない。この選択肢はメッツ自身が示唆している[28]。実際 PJ と TL に関してはそうした選択肢もありうると思われる。その場合、PJ において言及される「不死」は、ある形の「死後の存続（afterlife）」と解釈することが PJ の自然な理解だろう。TL に関しても、たとえばある計画や願望の実現に対して短すぎる生（時間的限界）を補う形のある程度の存続として「不死」を解釈することは無理のない理解であろう。以上のように解釈するなら、PJ と TL は、依然として超自然主義的な主張かもしれない。だがその場合それらは文字通りの永遠の存続に関する主張ではない。

しかしながら、メッツが UC を引き出すトルストイの主張には、人生の意味と死との強い関係が明示的に含まれているように見える。そしてそれは PJ と UC と TL のいずれのものとも異なる。トルストイは次のように述べる。

> 今日、でなければ明日、疾病が、死が、私の愛する人々の上へ、また私の上へ、襲いかかって来るであろう、（現にいくどか襲いかかって来たのである！）そして、腐敗の悪臭と蛆虫のほか、何物も残らなくなってしまうのだ。私の行為は、それがどのような行為であろうとも、早晩すべて忘れられてしまい、この私というものは、完全になくなってしまうのだ[29]。

もちろんこの一節には、自身がもたらした結果が（忘れられることで）無になるという考え、つまり UC も含まれている。そしてメッツの指摘する通り、その考えは誤りである。ずっと語り継がれることも可能であるし、永遠の存在者に影響を残すことも可能である。そしてそのために不死は必要ではない。だがこの一節には、死によって人生がただちに無意味になるという、裏返せば、人生の意味には不死が不可欠だという、不死と人生の意味との端的な結びつきが示されている。

27　獲得した $\mathcal{P}$ を失うような場合は $\mathcal{P}$ の再獲得が問題となりうる。だが、$\mathcal{P}$ の獲得とまったく同様のことが $\mathcal{P}$ の再獲得について言うことができ、いずれにせよ永遠の存続は必要ない。

28　Metz (2002), p. 792.

29　トルストイ『懺悔』、31 頁。引用は原久一郎訳。

PJ と TL および UC において、不死が、あくまで人生を意味あるものにする諸性質の獲得のための一条件として登場するのとは対照的である。以上のことから、トルストイの主張には UC と異なる考えが含まれると私は考える（IR との関係について言えば、IR にはメッツの取りあげるものとは別の論拠がありうる、ということである）。

5. 不死に関する別の解釈

以下では、トルストイの主張に含まれるメッツが触れていない考えを明確にしたい。まず、人生が意味をもつ条件に関する次の一般的な図式を確認する必要がある。ある時間にある人の人生に意味があるとは、その時間に

［1］$\mathcal{P}$ をもつようなある人が存在する。

ということと同値である。人が $\mathcal{P}$ をもつには一つの形式しかないが、他方 $\mathcal{P}$ をもたないという場合には二つの形式がある。すなわち、

［2］ある人が存在し、その人は $\mathcal{P}$ をもたない。
［3］$\mathcal{P}$ をもつ当人が存在しない。そもそもその人が存在しない。

の二つである[30]。［2］が表すのは、ある存在する人について、その人が $\mathcal{P}$ をもたないということである。つまりその人の人生が $\mathcal{P}$ に関して有意味になっていないということである（それゆえもし $\mathcal{P}$ がその人の人生に有意味さをもたらす唯一の性質であるならば、［2］によってその人の人生の無意味さを表現することができる）。［3］で念頭においているのは、死者の不在という現象である。つまり、$\mathcal{P}$ をもつのであれもたないのであれ[31]、死によってそのような人がもはや存在しないこと、すなわち人生が終わったということである。私の考えではトルストイが主張する「人生の無意味さ」には［3］が含まれる（またこれが「死んでしまうなら人生は無意味だ」といったニヒリズム的見解において「無意味さ」と呼ばれているものの条件であるが、それについては次節で論じる）。詳しく説明しよう。

ある人がある時点 t_1 に $\mathcal{P}$ を獲得するとする。$\mathcal{P}$ は道徳的完成でもよいし、家族との信頼や、もっとありふれたものでもよいだろう。その人が t_1 よりあとの時点 t_2 にその $\mathcal{P}$ を失う仕方を考えよう。その人はそれを恐れている。その人が t_2 以降も生き続ける場合、t_2 以降その人の人生は［2］の意味で $\mathcal{P}$ をもたない。これが一つの仕方である。だが別の場合も考えられる。$\mathcal{P}$ をもつ

30　a を任意の人、$\mathcal{P}$ を人生を意味あるものにする性質として、形式的には次のように表現できるだろう。

［1］$\exists x\,(x=a \,\&\, \mathcal{P}(x))$
［2］$\exists x\,(x=a \,\&\, \neg\, \mathcal{P}(x))$
［3］$\neg\exists x\,(x=a \,\&\, \mathcal{P}(x)) \,\&\, \neg\exists x\,(x=a)$

否定がかかる箇所に注意されたい。［3］は a の指示対象の存在仮定から自由な論理のもとで初めて表現可能である。私の考えでは死者の不在という現象を正しく表現するには、こうした（またはこれと同等の表現力をもつ、いわゆる「マイノング主義論理」などの）非標準的な論理が必要である。

31　［2］の仕方で無意味な人生に関しても［3］と並行的な次の［4］が言える。

［4］$\neg\exists x\,(x=a \,\&\, \neg\, \mathcal{P}(x)) \,\&\, \neg\exists x\,(x=a)$

ある人が t_2 に死を迎え、死後の存続もないとしよう。その場合は［3］の意味で t_2 以降 $\mathcal{P}$ を「もたない」と言うこともある意味ではできる。

さて、時点 t_2 にその人が $\mathcal{P}$ を失わないにはどうすればよいか。$\mathcal{P}$ を失わない仕方には、［2］に関して「$\mathcal{P}$ をもたない（意味がない）」を否定する仕方と、［3］に関して「存在しない」を否定する仕方がある。前者は［1］の意味での（普通の意味での）人生の意味の維持である。後者は死の否定であり、この考えこそトルストイの主張に含まれていると私が考えるものである。それはとくに、前掲のような嘆きに基づき不死を求める主張の一つの自然な解釈であると思われる[32]。前掲の引用箇所からは、トルストイにとっての $\mathcal{P}$ が、家族の幸せであると示唆される。トルストイは［2］の意味でも人生が無意味になるのを恐れていたかもしれない。たとえば自身より先に家族を亡くすとき、彼は［2］の意味で $\mathcal{P}$ を失う。またもちろん、自身がもたらした結果を忘れ去られることに対する、UC と関係する恐れも彼にはあるだろう。だが前掲の一節に次の恐れが表現されていることもまた、いまや明白だと私は思う。つまり、死によって $\mathcal{P}$ を失うこと、すなわち［3］の仕方で人生の意味を失うことへの恐れである。私の考えでは、トルストイ的な見解に見いだすべき不死に関する UC と別の考えとは、［3］を否定するために不死を求めるというものである。

ただし注意が必要である。不死はたしかに［3］の否定を意味する。しかし、上述のようなトルストイ的見解の解釈のもとでは、メッツが論じた PJ や UC や TL におけるのとは異なり、不死自体を「永遠の価値」といった種類の性質の獲得の条件として考えるべきではない。あくまで、獲得のために不死を必要としないような人生の意味[33]を［3］の仕方で失うことを望まないというのが、そのように捉えたトルストイ的な考えの率直な表現である。さらに言えば、家族の幸せといった自然主義的に獲得しうる性質こそが人生に意味を与える性質だとするのが、トルストイの考えの一つの自然な解釈ではないだろうか。もしそうならば、不死への言及があるにもかかわらずそれは、超自然主義には分類されず、むしろ意味ある人生の実現それ自体にとっては不死は必要でないとするような考えである。要するに「不死」は、永遠に存続する霊的な魂ではなく、端的な死の否定を意味しうるとも解釈すべきなのである。もちろん、たしかに不死によって死の否定は実現されるが、そのことによって人生が意味あるものになるのではない。人生を意味あるものにする性質はこの場合あくまで、家族が幸せであるといった性質である。

6. 死とニヒリズム

本稿では、メッツの議論を検討することを通し、人生の意味と不死および死の関係を明確化することを試みた。ところで、［2］と［3］が区別され、［2］によって無意味さを表せることは明らかであるが、それでは［3］はどうだろうか。つまり死によって $\mathcal{P}$ のような性質を“失う”ことが、本当に人生を無意味にするかどうか、という疑問である。これに答えて本稿を終えるこ

32　この考えをトルストイに帰することができると断言するつもりはない。ひょっとすると私によるトルストイの理解は誤っているかもしれない。本稿の目的はトルストイの解釈ではなく、論理的に可能な一つの見解を明確化することである。

33　そこには、メッツが取りあげる「完全な正義」、「究極的結果」、「限界の超越」といった概念とそもそも結びつけて論じる必要がないような $\mathcal{P}$ および人生の意味が含まれる。

とにしたい。

私の考えはこうである。［3］は無意味さを表していない[34]。目の前のテーブルに赤いリンゴがあるとしよう。そのリンゴも時間が経てば傷んで茶色くなる。変色したそのリンゴは赤くない。変色する前、赤いうちにリンゴを食べればそのリンゴは無くなる。このとき、食べて無くなってしまったリンゴについて、そのリンゴが赤くないとは言わない。そのリンゴは赤くないのではなく、存在しないのである。前者が［2］と、後者が［3］と対応する。存在しないリンゴを赤くないとは言わないのと同様に、［3］を $\mathcal{P}$ の「喪失」と呼ぶのも、それゆえ「無意味さ」と呼ぶのも不適切だろう。私の考えでは、これが「どうせ死んでしまうなら人生は無意味だ」という前述のニヒリズム的な考えが犯している誤りである[35]。また［2］と［3］のそれぞれの否定について言えば、先に見たように、［2］の否定はたしかに、人生の意味を主張することである。しかし［3］の否定は、人生の意味を主張することではなく、人生の終わりを否定することである[36]。

ニヒリズム的見解は誤りであると私は考える。だが他方で、ニヒリズム的見解は人生の意味のもつある重要な側面を捉えているとも思う。メッツが前提するように不死を超自然主義的に考えるとしよう。その場合、不死と人生の意味との関係に関する説明は（通常われわれが想定する）自然主義的存在論のもとでは一般に次のようなものになるだろう。すなわち、不死によってしか得られないような「最上級の価値」[37]といったすばらしい性質があるのだが、われわれはそれを手にすることができない。なぜなら人は死ぬからであり、だとすれば人生は無意味である、と。だが自然な説明の順序は逆ではないだろうか。われわれはすでにわれわれの生のなかに善きものを見いだしている。だが人は死に、存在しなくなってしまう。そのことに気づくからこそ人生の「無意味さ」が主張される。そしてその「無意味さ」を否定ないし克服するために、不死（またはそれより弱い形の死後の存続）を求めるのではないのだろうか。死を嘆くニヒリズム的見解は、われわれの生にすでに内在している人生の意味を適切に捉えていると言える。とはいえやはり、次

34　二つの種類の意味（無意味さ）があるという主張もある。R・テイラーは客観的意味と主観的意味とを両立可能なものとして区別する。すなわち、ある人について、その人の人生が客観的に無意味であり、かつ、主観的に意味があるということが可能である。（Taylor（1970）の見解は通常、主観主義と理解される（cf. Metz（2002）, p. 795）。Taylor（1970）の議論の詳細な検討は Feinberg（1992）を、テイラーの主観主義への批判は Singer（1995）, chs. 10, 11 を参照。またテイラーものちに Taylor（1987）で見解を変えている。）またノージックは、限定された文脈における通常の意味での人生の意味と、究極的な意味とを区別する（Nozick（1981）, p. 618［邦訳下巻 493 頁］）。しかし、［2］と［3］（およびその否定）の区別は、これらの区別とは異なる。このような二種類の意味・無意味さを認めた上でも、本稿の区別はそれとは独立に成り立つ。たとえば、客観的に無意味で主観的に意味ある人生についても［2］または［3］の両方が成り立ちうるのである。二種類の意味があるというテイラーやノージックの見解自体には、本稿はとくに反対しない。

35　次のように言う人がいるかもしれない。リンゴが変色しすぐにその鮮やかな赤さを失うとき、その赤さについて、「はかない」と表現することができる。このはかなさと類比的な意味で「人生が無意味である」と述べることがあり、「$\mathcal{P}$ は失われやすい」それゆえ「人生の意味は失われやすい」といった意味で「人生が無意味である」という言い方もまた自然な言葉づかいである。そして、およそ自然主義的な $\mathcal{P}$ が果物の色と同様失われやすくはかないものだとすれば、自然主義的な世界において、人生は無意味でありニヒリズムは正しいのだ。こう指摘する人がいるかもしれない。（この指摘の可能性は本誌の匿名の査読者によって示唆された。）このような指摘には次のように応えたいと思う。第一に、そのような「はかなさ」は、あくまでリンゴが存在するかぎりでその性質の喪失について述べるのが、通常の用法だと思われる。リンゴが赤いうちに存在しなくなるとき「はかない」と言われるとすれば、はかないのはその赤さではなく、その存在である（人が若くして死ぬときも、はかないのはその若さではなくその存在である）。よって第二に、仮に自然主義的に獲得しうる $\mathcal{P}$ が一般にはかなく、その意味での「ニヒリズム」が正しいとしても、それは本稿が反対する「どうせ死んでしまうなら人生は無意味だ」と表現しうるニヒリズムではない。第三に、自然主義的な $\mathcal{P}$ が一般にはかないかというと、それは疑わしいと思われる。たとえば家族の幸せや事業の達成は、相当の努力や幸運を必要とするにしても、自然主義的世界のなかで獲得でき満足な仕方で維持しうると思われる。

36　ウルフも、T・ネーゲル（およびトルストイやカミュ）のニヒリズムが主張する「無意味さ」と、真正の人生の無意味さとを区別しなければならない、と述べている（Wolf（1997）, pp. 214-5）。だが、ウルフが真正の意味での無意味さと区別するのは、宇宙の中での人間の存在の卑小さによる「無意味さ」であり（Wolf（1997）, p. 215）、［2］に対して［3］を区別するのではない。

37　Metz（2003）, p. 177. メッツによれば、魂と神の概念の共通性を説明するのが「最上級の価値」の概念である。

の点を再度強調しておきたい。死を人生の無意味さに結びつけるべきではない。すべての意味ある人生が最後には終わるとして、それが目眩を起こさせるような大変なことに思えるとしても、それによって人生が無意味になるわけではないのである。

文　献

Feinberg, J. (1992), "Absurd Self-Fulfillment," reprinted in Klemke and Cahn (2008), 153-83.

Griffin, J. (1986), *Well-Being: Its Meaning, Measurement and Moral Importance*, Oxford University Press.

伊勢田哲治『哲学思考トレーニング』、筑摩書房、2005 年。

Klemke, E. D. and Cahn, S. M. eds. (2008), *The Meaning of Life: A Reader, 3rd Ed.*, Oxford University Press.

Metz, T. (2001), "The Concept of a Meaningful Life" *American Philosophical Quarterly* 38, 137-53.

――― (2002), "Recent Work on the Meaning of Life," *Ethics* 112, 781-814.

――― (2003), "The Immortality Requirement for Life's Meaning," *Ratio* 16, 161-77.

――― (2007), "New Developments in the Meaning of Life," *Philosophy Compass* 2/2, 196-217.

――― (2008), "The Meaning of Life," *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (*Fall 2008 Edition*), Zalta, E. N. ed., URL =<http://plato.stanford.edu/archives/fall2008/entries/life-meaning/>.

中島義道『どうせ死んでしまうのに、なぜいま死んではいけないのか?』角川書店、2008 年。(『どうせ死んでしまう……私は哲学病。』(角川書店、2004 年) 改題。)

Nozick, R. (1981), *Philosophical Explanations*, Oxford University Press. [ロバート・ノージック『考えることを考える (上・下)』坂本百大・西脇与作・戸田山和久・横山輝雄・柴田正良・服部裕幸・森村進・永井均・若松良樹・高橋文彦・荻野弘之訳、青土社、1997 年。]

Parfit, D. (1984), *Reasons and Persons*, Oxford University Press. [デレク・パーフィット『理由と人格 ── 非人格性の倫理へ』、森村進訳、頸草書房、1998 年。]

Singer, P. (1995), *How Are We to Live?: Ehics in an Age of Self-Interest*, Prometheus Books. [ピーター・シンガー『私たちはどう生きるべきか ── 私益の時代の倫理 [改訳版]』山内友三郎監訳、法律文化社、1999 年。]

Taylor, R. (1970), *Good and Evil*, Macmillan Publishing Co.

――― (1987), "Time and Life's Meaning," *Review of Metaphysics* 40, 675-86.

Thomas, L. (2005), "Morality and a Meaningful Life," *Philosophical Papers* 34, 405-27.

トルストイ『懺悔』、原久一郎訳、岩波書店、1961 年改版。

Wolf, S. (1997), "Happiness and Meaning: Two Aspects of the Good Life," *Social Philosophy and Policy Foundation* 14, 207-25.

※なお本稿は平成 23 年度科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) による研究成果の一部である。